



TITLE:

編集後記 (泌尿器科紀要 第5巻第7号)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

編集後記 (泌尿器科紀要 第5巻第7号). 泌尿器科紀要 1959, 5(7): 634-634

ISSUE DATE:

1959-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111778>

RIGHT:

## 編集後記

泌尿器科の独立は本誌5月号巻頭文に於て高安教授も述べられた如く甚だ重要な事である。皮科とは全く別個の学問である事は自明の理であるのに、現実にはまだ両科が混合しているのはどういふ訳であろうか。その理由の一つとして、両科があまり発達していなかつた旧い時代の慣習がまだ残っている事が挙げられる。然し現今では両科とも別々に著しく進歩発展しており、従つて両科に亘つて同一人が習熟する事は不可能な状態である。また他の理由として、両科を分離するとそれぞれ単独では弱体であり、患者も少く収入も少くなると考えられる事も挙げられる。然し泌尿器科単独では収入が少いとは必ずしも云えない。京大病院（甲表）の昭和34年2月の各科別健保請求点数にては、泌尿器科は内科、外科に次で第3位であつた。患者数も病床数も他科に比べて少いの点数がこのように多いのには我ながら驚いた次第である。このように大きな病院ならば専門科目としても経理的に充分に成り立つてゆく。但し昔の泌尿器科は淋疾治療を主な対象としていたので個人開業も可能であつたが、現在は甚だ変貌して大規模なものになつていたので個人開業の手には負えない。また仮りに収入が少くても、故に皮科と同居させて置くという事が不合理であるのは明かである。次に泌尿器科の独立が大学或は大学院設置の条件になつていない事、換言すれば泌尿器科が独立していても大学及び大学院が設置され得るという事情になつていない事が泌尿器科の独立を妨げている。前記の如く皮科と泌尿器科とは別の学問であり、一人で両科を研究指導してゆく事の無理なるを思えば、いやしくも大学或は大学院である限りは、両科の分離は絶対に必要な条件である。そこで現在両科を併せて指導してられる大学教授或は大病院の医長の人達が卒先して両科の分離に熱意を持つて頂く事と、高安教授も云われるように、大学の教授会或は大病院の幹部が両科の分離に大きな関心を持たれる事が、両科の独立にとつて極めて重要な事であると考えられる（昭和34年7月）

## 購読要項

1. 発行は毎月（年12回）とす。年間購読者を以て会員とする。
2. 会員は年間料金 1,000円を前納する。1冊料金100円、払込みは振替口座番号京都 4772番 泌尿器科紀要編集部、或は第一銀行百万遍支店。
3. 入会申込みは氏名（フリガナ）、住所（雑誌郵送先）、勤務先、職地位、自宅開業の刊、送金方法を御記入の上編集部宛。

## 投稿内規

1. 原稿の種類は綜説、原著、臨床報告、その他。寄稿者は年間購読者に限る。
2. 原稿の長さは制限しないが簡潔にする。
3. 原稿は横書き、当用漢字、平仮名、新仮名使いを用い、片仮名には括弧を要しない。400字詰原稿用紙を用いること。附表、附図はなるべく欧文にすること。
4. 文献の書式は次の如くする。著者名：誌名、巻数：頁数、年次。  
例、中野：泌尿紀要、1：110、昭30、Lazarus, J. A. : J. Urol., 45 : 527, 1941.
5. 300語以内の欧文抄録を記し、之には欧文の標題、所属機関名、ローマ字著者名を付け、なるべくタイプライターを用いること。希望の場合は当編集部にて翻訳します。抄録用の原稿を送ること。翻訳の実費は申受く。
6. 掲載料は4頁迄毎頁500円、それ以上の頁、アート頁、図表、写真は実費を申受ける。別冊20部を無料贈呈。それ以上は実費を徴収する。この場合には予め希望部数を申込むこと。特別掲載も考慮する。
7. 校正は編集者が行方が希望により著者校正とする。
8. 原稿送り先は京都市左京区聖護院 京都大学病院 泌尿器科紀要編集部。